



発行

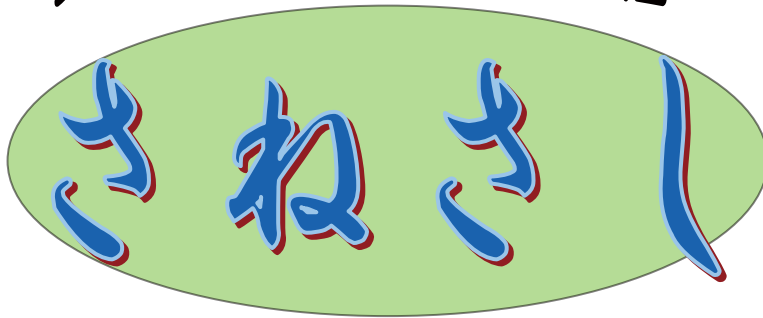
平成27年3月14日

相模原市文化財調査・普及員

広報グループ

文化庁指定
文化財愛護
シンボルマーク

両手のひらと日本
建築伝統の組物を
イメージしたもの



～「さねさし」とは、相模の枕詞です～

田名の文化財 もうちべんざいてん 望地弁才天

望地弁才天は、田名バスターミナル（旧上田名バス停）から北里大学行きで4つ目の「南光寺前」下車、徒歩8分で望地キャンプ場に隣接した、相模川沿いの風光明媚なところにあります。

田名地域の養蚕繁栄のために弁才天尊像が祀られ、養蚕が途絶えた今日も地区の大切な文化財として、地元の望島殿弁才天保護委員会によって大事に保存されています。祀られている「木造 弁才天坐像」は市指定有形文化財（彫刻）であり、御開帳は元旦と4月第1日曜日のみとなっています。

地元の保護委員会は、江成董次委員長はじめ12名の方が毎月最終日曜日9時から弁天堂周辺、境内、覆屋、さらに弁才天坐像の埃を丁寧に落とし、清掃・換気を行っています。

弁才天坐像の由来は、もとは江ノ島岩屋弁天として安置されており、明治元年（1868）に廃仏毀釈で廃棄することになりました。しかし、廃棄するのは惜しいと藤沢市の常光寺本堂の天井裏に隠匿されました。10年後の明治10年に田名南光寺和尚が茶話で由緒ある尊像のことを聞き、常光寺に懇願し、守護として田名に奉招することとなりました。

明治11年、相模川下流の「望陽島」の殿舎に安置され、厚い信仰を得ました。その後、明治39年の大洪水により、島もろとも流失しましたが、地元若者の決死の救出により尊像は難を逃れ、南光寺に安置され、昭和26年に現在地に殿舎を建て安置しました。

なお、保護委員会の清掃の時に参拝すれば、高さ45.5cmの温和な弁天さまを拝顔できるかもしれません。

参考資料『田名の歴史』『相模原の文化財 木造 弁才天坐像』

（西部班 嶋原）

目次

- ① ・ 田名の文化財 もうちべんざいてん 望地弁才天
- ② ・ 古民家園ひなまつり
・ 東海道から甲州道中へ
— 古道班の旅
- ③ ・ 下溝の一里塚はここだ！
きっしょうざんじょうこうじ
・ 吉祥山浄光寺
- ④ ・ 大沢地区の松尾芭蕉の句碑を訪ねて



↑ 弁天堂正面
← 弁才天坐像

古民家園 ひなまつり

2月22日（日）大島にある相模川自然の村公園内の古民家園に於いて“ひなまつり”を行いました。

どんよりといまにも降り出しそうな空模様の中、60余名の参加者がおり紙で、小さなお子さんは、お父さん、お母さんと一緒に色紙を選んで、男雛と女雛を折り、牛乳パックを利用した台紙に貼り付け、桃の花びらやぼんぼりなどで背景を作って出来上がり、可愛いおひなさまが出来ました。

その後、紙芝居のボランティアグループ「ほっこり座」のメンバーによる紙芝居が開幕を告げる拍子木の音とともに始まり、「おひなさまがうまれたよ」「やぎさんとひつじさん」など全4篇が上演されました。

出し物の合い間合い間に入る問いかけや語りに真剣に答えを考えたり、笑いを誘われたりと、参加者もグループのメンバーも一体となって楽しみました。

紙芝居のあとは、いろいろの炭火で作った白酒に見立てた甘酒で喉を潤し、閉会となりました。

数年来、ひなまつりを行っていて、女の子のまつりという意識が強いためか、ここ2、3年は男子の参加が少なかったのですが、今回は老若男女の幅広い参加があり、おり紙も紙芝居也大いに盛り上がりしました。

（古民家園普及事業実行委員会 西田）



古民家園 全景



おり紙でひな人形づくり



紙芝居上演中

東海道から甲州道中へ 一古道班の旅

2009年7月7日の七夕の日に、古道班は日本橋に集合、「東海道」の旅がスタートしました。ひたすら早く歩くことが目的ではなく、街道周辺に建つ神社と寺院は必ず拝観し、資料館や博物館があれば極力見学することを了解しあい、旅が始まりました。

旧宿場町をポイントにして歩き、江戸方見附（東京方の宿場の見張所）を入るとホッと、大名気分で本陣の跡を訪ね、高札場や問屋場跡を探し、周辺の社寺を参拝しました。上方見附（京都方）を出立するときは、路銀は大丈夫か、道中ゴマノハイ（強盗など）が居るのではないかと一人前に緊張し、回を重ねるごとに、皆はすっかり江戸時代の旅人氣分になっていました。

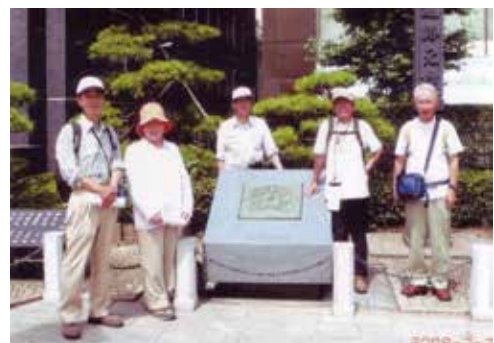
信仰の対象はさておき、日本では神社や寺院が長い間にわたって大切に護られてきたため、社寺が数々の文化財を所蔵し、地域の歴史を今に伝えています。その有り難さを痛感しました。街道の一里塚、道標、松並木、庶民の祈りが伝わってくる石仏など、多数の文化遺産との出会いが私たちの旅を実り豊かなも

のにしてくれました。

2014年11月4日、箱根町の町立郷土資料室であり、5年半に及ぶ東海道の旅・神奈川版を終えました。やむをえぬ事情で、一部の仲間と最後まで一緒できなかったことが心残りです。

本年の3月からは今まで同様毎月第一火曜日に、「甲州道中」を、地域の文化と触れ合いながら歩きます。趣旨に賛同する同好の士の参加をお待ちします。

（古道班 宮下）



2009年7月7日 日本橋 道路元標にて

下溝の一里塚はここだ！

南区麻溝台地区には、かつて現在の町田市木曽地区に向かう「木曽道」が通り「一里塚」がありました。

しかし、ここは陸軍士官学校の演習地として接收され、道も塚も消されてしまいました。

南部班では、継続してこの二つを追究してきました。

「木曽道」の復元は容易でした。古い版の地形図にはそれが記載されていたからです。

「一里塚」については、「北端点の近くにあった」という言い伝えを得ていたのですが、その先に進めずいました。そこへ仲間の一人が『麻溝村土地宝典』という地籍帖を掘り出してきました。

これにより地籍図上で「一里塚」(『相模国風土記稿』では「二ツ塚」)の所在地を確認することができました。くわえて「北端点」の位置についても確認でき、この2点間の距離を割り出せることになったのですが、地籍図であるため距離などはかなりアバウトであることを勘案しなければなりません。

そこで、より実際に近づけるため『土地宝典』にある地割を2万5千分の1の地形図に転移させ、それか

ら所要の長さを計測し距離を出すという方法を取りました。

その結果、「一里塚」と「北端点」の距離は152.5mであることがわかりました。

そして方角が真北から西に18度傾いた方向でしたのでこの二つを組み合わせることで「下溝一里塚」の位置を確定させることができました。

現地には当てはめると、麻溝台二丁目信号の南、コンビニ店の駐車場の中央部です。

現在は、一里塚の名残りを留めるものは全くありませんが、今後は今回の調査結果を活用し、一里塚を普及していきたいと考えております。



下溝の一里塚（現在は駐車場）

(南部班 畠山)

きっしょうざんじょうこうじ 吉祥山浄光寺

相模原市緑区吉野の高台、奈良本という集落に吉祥山浄光寺があります。

浄光寺の山門や境内からは、遠く丹沢山塊が望め、相模湖と周辺の山並みが箱庭のように展望でき、吉野地区でも指折りの風光明媚な眺めを誇っています。

浄光寺は臨済宗建長寺の末寺で貞和年間（1345～1349）可翁宗然大和尚開山と伝えられています。本尊の木造釈迦如来立像の胎内仏、高さわずか11cmの木造「阿弥陀如来坐像」は、相模原市の指定文化財になっています。

また、浄光寺には太田南畝（蜀山人）の狂歌が水墨画とともに襖絵として残されています。



浄光寺 参道

「親渡す為に掛けしか小猿橋

これぞ孝婦（甲府）の道としるべし」

「悪はよせ（与瀬）善きは吉野の二瀬越え

これぞ教えの近道と知れ」

江戸時代から明治初期まで吉野宿にあった「小猿橋」と、人造湖の相模湖ができる前の勝瀬集落にあった「二瀬越」を詠んだものです。この襖絵は浄光寺23世萬元和尚の筆になるものだと伝えられています。なお、指定文化財の胎内仏は非公開です。写真

は「吉野宿ふじや」で見ることができます。

(津久井班 星)



浄光寺 襖絵

大沢地区の松尾芭蕉の句碑を訪ねて



④下九沢八坂神社の芭蕉句碑



⑤下九沢小泉家の芭蕉句碑

江戸時代に俳句（俳諧）をした俳人（俳諧師）には、芸術性豊かな松尾芭蕉、矢数俳諧において1昼夜で23,500句を詠んだ談林派の井原西鶴、人間味あふれる作風の小林一茶、絵師としても活躍した与謝蕪村などがいます。芭蕉は西鶴より2年遅く正保元年（1644）に、武家である松尾家の次男として伊賀上野で誕生し、西鶴より1年遅く元禄7年（1694）10月12日に51歳で逝去しています。辞世の句は「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」です。一方、西鶴は町人の出で俗世間に交わって生き、浮世草子を残しました。芭蕉のことを「俳諧に思ひ入りて、心ざしふかし」とほめています。

芭蕉の句碑（芭蕉塚）は主に三十三回忌以降建立され、一説では全国で約2,442基あると言われます。東京都93基、千葉県77基、埼玉県114基、神奈川県には59基が数えられると言われます。相模原市には下記の6基（①～⑥）があります。この内、緑区大沢地区には3基（④～⑥）が存在します。

- ①南区当麻無量光寺の芭蕉句碑1基—「世にさかる花にも念佛まうしけり鳥」芭蕉翁。文化5年（1808）に建立。
- ②中央区上溝本町の芭蕉句碑1基—「本（ほ）ととぎすまねくか麦のむら尾は那」（はせを）。市登録文化財（歴史資料）。明治26年（1893）に芭蕉没後200年を記念し、蕉林社同盟の人々により建立されました。
- ③緑区藤野町佐野川倉子峠の芭蕉句碑1基、—「春なれや名もなき山の朝霞」（はせを）。建立年／者とも不明。
- ④緑区下九沢八坂神社の芭蕉句碑1基—「秋布可起（あきふかき）隣ハ（となりは）何乎（なにを）寸流人（するひと）そ」。市登録文化財（歴史資料）。文化7年（1810）に法師流の俳人西狐が天王森に建立したものを現在の六地藏に移転しました。側面に西狐の句「ものうきも是におさまれ虫の声」も刻まれています。明治5年生まれの小説家で有名な芥川龍之介は、客観的な写実こがらしに徹し「凧や目刺しにのこる海の色」を残していますが、芭蕉のこの「秋布可起…」の句を300年に1人の感性を持つ人とほめていると言います。
- ⑤緑区下九沢作の口小泉家の芭蕉句碑1基—「陽炎や柴胡の原の薄曇り」（芭蕉翁）。市登録文化財（歴史資料）。法師流の俳人利角が文政12年（1829）に建立し、芭蕉塚と呼ばれていたものが、明治2年（1869）年に小泉家に移設されたようです（個人の敷地内のため、家の人にとことわった上で見学ができます）。
- ⑥緑区大島神沢の神沢不動の芭蕉句碑1基—「しはらくは花の上なる月夜哉」（芭蕉翁）。建立年／者とも不明。

（北部班 駿河）

発行連絡先 相模原市教育委員会 文化財保護課 電話 042-769-8371